

震災半年 笑って楽しんで被災地支援

東日本大震災被災地を支援するチャリティー企画「信州すくませ落語会」(佐久法人会御代田、軽井沢西支部主催)が19日午後2時、佐久市の佐久勤労者福祉センターで開かれる。プロの噺家の前で、佐久市と軽井沢町の小中学生3人が、オリジナルの創作落語を披露する。3人は落語も高座にも初めだが、稽古に一生懸命で「笑って楽しんで元気になって」と張り切っている。【藤澤正和】

稽古に励む(左から)木本君、由井君と指導の海老原さん



出演は、佐久長聖中1年、木本純君(12)▽白田中1年、由井南貴君(12)▽軽井沢中部小5年、香場翔君(10)の3人。先月初めに出演を決意し「アピールするのが好き」「こんな経験はめったにできないし、自分たちも支援に協力したい」など「意欲を語る」。

指導するのは、軽井沢町在住の放送作家、海老原靖芳さん(58)。テレビのバラエティー番組「風雲一たけし城」

小中学生3人が創作落語

佐久で19日、プロの高座で競演

や「コメディお江戸でござる」の他、吉本新喜劇の舞台脚本などを手掛けた。木本君と由井君は、海老原さんが方言や、なじみの地名を織り込んで創作した「長野の寿限無」を2人で演じる。

2人落語は、新しい見せ方で実験的な挑戦。漫才のような掛け合いではなく、それぞれ正座したまま、寿限無という若者役(大木君)と、おじいさん役(由井君)に分かれて面白おかしく語る。

毎週末の稽古では、海老原さんから「動きと表情を大きく」「声にメリハリつけて」と注文が飛ぶ。何度も語りを繰り返す、約1時

間半、熱を帯びた指導が続いた。

香場君の1席は、医師と患者のコミカルなやりとりの創作落語。海老原さんは「子供たちは学会レベルを超えた頑張りで楽しませてください」と太鼓判を押す。

落語会のプログラムは当初、瀧川鯉昇と柳家喜多八の両師匠の

「二人会」だった。支援物資を届けてきた実行委員会の大井康史さん(46)が「収益金は被災地への義援金。落語を笑いで復興支援の輪を広げたい」と内容を海老原さんに相談し、前座に子供たちの創作落語を加えた。

料金は大人2000円、小中高生1000円。問い合わせは事務局長の大井建設工業(0267・32・3333)。